

機関番号：34307

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520049

研究課題名 (和文) 瑜伽行中観派の修道論の解明 — 『修習次第』の研究 —

研究課題名 (英文) The path to awakening of the Yogācāra-Madhyamika school:  
A Translation of the three Bhāvanakramas

研究代表者

一郷 正道 (ICHIGO MASAMICHI)

京都光華女子大学・学長

研究者番号：60065844

研究成果の概要 (和文)：後期インド仏教の論師カマラシーラによる『修習次第』の翻訳研究を行い、付録に、瞑想の方法を述べる箇所テキスト対照表、引用文献一覧、シノプシス等を加え冊子にまとめた。本書が提示する実践方法が「唯識観行」に基づくことを、先行する唯識文献の対応箇所をあげることで具体的に提示した。また引用文献一覧では、他の文献で同一文献の同一文言を引用するケースを精力的に収集し提示した。これらは、仏教における「哲学」と「行」の伝承の系譜を明らかにする基礎資料を提供するものともなる。

研究成果の概要 (英文)：The present work consists of a translation of the three Bhāvanakramas with four appendices (I. a table of the method of meditation expounded in the three Bhāvanakramas, II. a list of corrections for the Sanskrit texts, III. a list of references to the sūtras quoted by the texts, IV. a synopsis of the three Bhāvanakramas). In the footnotes of our translation, we trace the source of the practice in the Bhāvanakramas back to the Yogācāra school and early Buddhism. In appendix III, we exhaustively collect instances in which other exegetical texts quote the same sentences of sūtra as the Bhāvanakramas. The work provides the foundation not only to study the Buddhist way to awakening according to the Yogācāra-Madhyamika school but also to help us greatly in our understanding of the tradition of "philosophical theory" and "spiritual practice" in Indian Buddhism.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・印度哲学・仏教学

キーワード：仏教学，瑜伽行中観派，修習次第，カマラシーラ，唯識観行，Kamalaśīla, Bhāvanakrama

## 科学研究費補助金研究成果報告書

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 申請者は後期インド仏教に展開したある思想的立場、いわゆる「瑜伽行中観派」の思想（ここでは、哲学的思想体系と瞑想等の具体的実践双方を指して「思想」とした）をインド撰述文献によって解明することを研究テーマとしている。この学派の哲学的思想の解明は、基本的に本学派を担ったジュニアナガルバの『二諦分別論』、シャーントラクシタの『中観莊嚴論』、カマラシーラの『中観の光』、『修習次第』、ハリバドラの『現観莊嚴論』等の文献読解によって可能と考えている。申請者は、すでに『中観莊嚴論の研究』（文栄堂、1985）を出版し、その中で、シャーントラクシタ著『中観莊嚴論』及び『自註』の校訂テキストと翻訳、カマラシーラ著『中観莊嚴論細註』の校訂テキストを公表し、本分野における基礎的な資料を学界に提供した。また、他の文献についても国内外の研究者による成果が蓄積され、「瑜伽行中観派」の哲学的思想体系の骨格はすでにその大枠を明らかにしているといえる。しかし、彼ら論師たちの思想が、単に抽象化された概念としてではなく、瞑想等の実践に裏付けられた修道論として論じられている点は十分に考慮されるべきである。本研究が取り上げた『修習次第』は「瑜伽行中観派」の哲学的思想と実践とが一体化した具体的な修道論の教科書とも言い得る文献で、「瑜伽行中観派」の思想を明らかにする上で欠くことができない資料だといえる。この点を踏まえたうえで、研究開始当初の同書をめぐる研究状況としては以下の三点(2)(3)(4)があげられる。

(2) 同書は修道論全体を包括的に著した文献であるため、個別の議論は著者カマラシーラの他の著作、あるいは「瑜伽行中観派」や他の学派の文献に求める必要がある。それら

を統合することで『修習次第』の説く修道論が理解されることになるし、そのような作業を行うことで、インド仏教史における「瑜伽行中観派」に至る修道論伝承の系譜が描けることとなる。近年、個々の文献の研究が進む中で、同書との関係が論じられつつあるが、『修習次第』の立場から、それらの成果が収集され検討される段階には至っていない。特に実践道については、唯識派の文献（具体的には『解深密経』や『摂大乘論』等）に見られる修行システムが同書に採用されていることは部分的に確認されているが、『修習次第』全体の実践道を、唯識派の諸文献に説かれるそれと具体的に比較検討する作業はまだ十分には行われていない。

(3) 『修習次第』は初・中・後篇の三篇立てとなっている。そのうちサンスクリット語写本が現存する「初篇」と「後篇」については、1958年と1971年に校訂本が出版されている。しかし、出版当初からその校訂の精度が十分でないことが指摘されてきた。チベット語訳のみが残る中篇の校訂は1981年に五島清隆氏により出版されている。その中で「中篇」⇔「初・後篇」間の同一表現が丁寧に収集され、「中篇」との比較、あるいは、「初篇」と「後篇」との比較から、より精緻な読解が可能となった。しかし、原典はそもそもサンスクリット語であり、また同書は多くの経典を引用するが、それら経典の多くもチベット語訳や漢訳でのみ現存し、『修習次第』の引用でのみ原語であるサンスクリット文が確認できる経典も少なくない。このようなことから、「初・後篇」の再校訂が期待される場所であった。そのような状況下、「初篇」の再校訂本の出版が2008年から2009年頃に予定されていることが明らかになっていた。

(4) 『修習次第』の翻訳は、各篇個別の翻訳

研究は邦訳・欧米語訳ともに数本発表されている。それらは学術的にレベルの高いものであるが、多くは1960年代から70年代にかけての仕事であり、その後の『修習次第』とその周辺の研究成果を統合した翻訳が期待される場所である。また、三篇は「仏位獲得のための修道」を明らかにするというテーマを根底に置きつつ、修道のどの側面にウェットを置いて解説するかが異なっている。各篇個別の翻訳研究がおこなわれる理由はここにあるが、カマラシーラの修道論全体をとらえるには、同書の内的連関に配慮した三篇全体の翻訳研究が望まれる。この点については、邦訳では全篇ともチベット語訳から翻訳されたものが一本あるのみ。英訳では数本存在するが、「瑜伽行中観派」思想の解明や、インド仏教史における修道論伝承の系譜という学術的見地からなされたものは少ないという状況であった。

## 2. 研究の目的

(1) 「瑜伽行中観派」における修道論を明らかにするための基礎資料を提供することを目的とする。具体的には『修習次第』全三篇の翻訳研究を行う。

(2) 全篇の翻訳を提示することで、同書が説く修道論の全体像を明らかにする。また、先に指摘したように、『修習次第』の翻訳研究の多くは30～40年前になされている。前項(2)で述べた近年の同書とその周辺の研究を吸収し、さらに唯識学派の実践道との比較検討することで、同書の説く修道論そのもの、そして、それに至る系譜を明確にしたい。

(3) 翻訳研究を行うにあたっては、より精度の高い原典の校訂テキストが求められる。初篇については再校訂の出版が予定されており、その業績を吸収した翻訳を提示できることが望ましい。しかしそれだけでなく、上記

(2)に提示した作業を行う中で、『修習次第』に関係する文献の用語法や同書三篇内の類似表現を丁寧に検討することでも、現行校訂本の不足を補うことは可能と考える。今後の『修習次第』研究に寄与できるよう、現行校訂本を厳密に吟味し、必要な訂正を加える必要がある。

## 3. 研究の方法

(1) 『修習次第』は「瑜伽行中観派」の修道論の全体を解説するため、トピックは多岐にわたる。それぞれのトピックごとに関連する一次・二次文献を収集し、『修習次第』の翻訳作業を進める中で、同書の内容とそれらとを比較検討することを徹底した。

(2) 翻訳にあたっては、校訂本に問題がある場合は、他の文献に類似した議論を探し、該当するものがあれば用語法等に注意し、テキスト訂正の必要性を吟味した。

## 4. 研究成果

(1) 『修習次第』全篇の翻訳に、アペンディクスとして、止観の方法を解説する箇所、三篇のテキスト対照表、テキスト訂正表、引用経典一覧、シノプシス等を加え、冊子にまとめた。

(2) 訳注作業を通しての成果のひとつは、本書が提示する実践体系が「唯識観行」に基づくことを、本書に先行する諸唯識文献に見られる対応箇所をあげることで具体的に明示できたことである。唯識学派と異なり、カマラシーラが依拠する中観派の修道論はその具体像が把握しにくい。今回、先行する諸唯識文献にその典拠を確認できたことは、カマラシーラの「瑜伽行中観派」としての修道論のみならず、中観派における修道論の全体像を明らかにする手がかりともなる。ことに、具体的な瞑想の方法については、同書を取り

上げるチベットの文献からも『声聞地』や『莊嚴經論』等唯識文献に説かれる瞑想方法を継承していることは確認されていた。今回の研究では、厳密にその箇所を特定し、さらに近年のそれら唯識文献に対する研究を手掛かりに、阿含・ニカーヤという初期經典に説かれる瞑想方法にその源泉を確認した。これは、インド仏教史全体における実践の傳承を検討する意味でも資料のひとつとなるものである。

(3) 「初篇」の再校訂のテキストは残念ながら、本研究の期間内に発表されることはなかった。しかし、先に述べた『修習次第』周辺の諸文献や唯識文献との比較、さらに同書三篇それぞれの類似表現を精査することで、より完成度の高い校訂が可能であることが確かめられた。現行校訂本の訂正が必要と思われる箇所については、テキスト訂正一覧にまとめた。

(4) 仏教文献では自身の思想的立場の正統性を証明する根拠として經典を引用するスタイルを取る。『修習次第』においても多数の經典が引用されている。チベット語訳でのみ残る「中篇」の校訂テキスト（五島清隆，1983年）等、これまでの同書の研究において引用經典の典拠が詳細に調べられている。本研究ではそれらの成果を集積した上で、同一箇所を引用する他の文献も可能な限り収集し、一覧にまとめた。異なる文献が、同一トピックに対して同じ經典の同一箇所を引用するとしても、必ずしも同じ解釈を示すとは限らない。時には、異なる解釈を示し、あるいは、自身の解釈に適應するよう、經典そのものの読みを変えている場合も見られる。このようなことから、『修習次第』に引用される經典が、他の諸文献でどのような形で引用されているかを確認していくことは、それぞれの文献の思想的立場やその系譜を明らか

にする上で、重要な手掛かりとなる。本研究の經典一覧は、そのための資料を提供することを目的に作成した。

(5) 三篇全体の構造を提示したシノプシスでは、三篇それぞれの対応関係を明らかにした。これにより、三篇それぞれの特色が明示できた。また、本書三篇の制作順序がしばしば論じられるが、三篇の精緻な比較はその問題解明の一助となろう。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計1件）

一郷 正道・小澤 千晶・太田 蔭子（私家版）  
『瑜伽行中觀派の修道論の解明－『修習次第』の研究－』2011年，全193ページ。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

一郷 正道 (ICHIGO MASAMICHI)  
京都光華女子大学・学長  
研究者番号：60065844

### (2) 研究分担者

該当なし

### (3) 研究協力者

小澤 千晶 (OZAWA CHIAKI)  
ブリストル大学リサーチフェロー  
研究者番号：50440863  
太田 蔭子 (OTA FUKIKO)  
大谷大学助教  
研究者番号：30586243  
上野 牧生 (UENO MAKIO)  
社団法人ドイツ恵光日本文化センター  
客員研究員  
研究者番号：70460657